日本仏教心理学会
ニュースレター

Vol.15　2016　年 4月 1日

目次

巻頭語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　吉田　悟

第七回学術大会より

1．第七回学術大会を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　阿部　洋子

2．第一回分科会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　鮫島　有理

3．日本仏教心理学会第七回学術大会参加報告・・・・・・・・・・・・・・　松下　弓月

4．第七回日本仏教心理学会学術大会に参加させていただいて・・・・・・・　小笠原亜矢里

お知らせ

1.　GRACEワークショップに参加された皆様

2.　カウンセリング実習をご検討の皆様へ

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　千石　真理

松村　一生

巻　頭　語

文教大学　吉田　悟

巻頭語執筆を引き受けてしまったが、さて、どうしたものか。いま（２月２５日夕）上野駅近くの某喫茶店で、ノートパソコン携え思案中である。勤務先が東武伊勢崎線（現、スカイツリーライン）上のため、都区内在住の私は、途中の北千住や上野でお茶をするのが日課となっている。私立大学の「一大事」である入試もほぼ終わり、気分転換に、Amazon Kindle で、ラノー（David G. Lanoue）（著）“Pure Land Haiku: The Art of Priest Issa” （邦訳すれば、「浄土の俳句：俳諧寺一茶の芸術」という感じか)を読み始めた。それを素材にして、つらつら書くことにしよう。しばらくお付き合いのほどを。

小林一茶（1763-1828）の生涯やエピソードは、井上ひさしの芝居、田辺聖子や藤沢周平の小説でお馴染みである。一茶は信州柏原のひとで、菩提寺は本願寺派明専寺であり、「父の終焉日記」に書かれているように、父親は篤信の真宗門徒であった。著者のラノーは、米国ルイジアナ州にあるザビエル大学（Xavier University of Louisiana）の日本文学教授で、一茶の句の英訳サイト HaikuGuy.com を主催している。この本の冒頭には奇遇にも、この喫茶店に程近い上野池之端・常楽院において、文化六年(1809 年) 3 月 2 日に詠まれた句が掲げられている。

花桶に蝶も聞かよ一大事

ラノーは、この本で下記のごとく英訳している。

on the flower pot

does the butterfly

also hear Buddha’s promise ?

意訳すると、「私だけでなく、寺の花桶の上では、チョウチョもお念仏（阿弥陀仏の本願）

を聞いているのだろうなあ」となるか。

ちなみにこの句は、一茶句集（角川ソフィア文庫）に未掲載で、あまり知られていないようだ。当時江戸では、阿弥陀像を安置する六ヶ寺（六阿弥陀）巡りが盛んだったようで、その第五番目の上野池之端・常楽院の花見に、一茶が訪れた際の見聞録（花見の記）に、この句は掲載されているのである。

さらに、「一大事」をキーワードにして一茶の句のデータベースサイトで検索すると、この句の原型である別句があることがわかった。この句は、ラノーのサイトで英訳されていた。

あか棚に蝶も聞くかよ一大事　（1808 年、文化句帖）

on the offering shelf

does the butterfly also hear

Buddha's promise ?

「ヒトである私だけでなく、寺の奉納棚の上で、チョウチョもお念仏（阿弥陀仏の本願）を聞いているのだろうなあ」ということになるか。ラノーによれば、あか棚とは、朱塗りの棚ではなく、寺の奉納棚のことだそうである。

チョウチョもお念仏（阿弥陀仏の本願）を聞くというまなざしには、「すべての生命への同朋意識」が感じられる。ラノーは、「チョウチョは毛虫から変態することから、毛虫（凡夫）からさなぎ（往生への目覚め）を経てチョウチョ(浄土往生)へと至る変容を、隠喩に含ませているのかも知れない。さらに、花桶は墓参りを連想するのでそれは死のメタファーであろうが、死への恐れは感じられない。また、寺のあか棚に飛来するチョウチョには、本願への絶対的な信頼に伴う『自然さ、無邪気さ、安心』が示唆されている。そして、ヒトよりチョウチョの方が、本願力の感受性、信心があるのではないかという、一茶のヒトへの皮肉とチョウチョへの憧れが感じられる。」といったことを書いておられる。

そう言われてみれば、一茶が表現するチョウチョのイメージは、一茶の本願力への純粋無垢な信心、あるいは信心が阿弥陀からの賜物であることを示唆しているように感じられる。また、一茶は、本願力の対象はヒトに限定されず、万物に注がれていると言いたげなように感じられる。

以上を書きながら、私が関心を持っている認知行動療法界隈でも、遅ればせながら最近、アクセプタンス（受容）が重視されるようになってきたことを思い出した。これまでは、嫌な出来事に対して、対処力、コントロール力をつけることが、専ら重視されてきたが、昨今では、集中して観察する、観察するだけで評価しない、そのまま受け入れるなどが重視されつつある。対処戦略からレジリエンスの育成へと、支援のポイントが変化しつつあるなども、昨今よく言われる。

しかし、心理学の存在しなかった文化文政期において、一茶は、愛娘を亡くしたその年の瀬に、「ともかくもあなた任せのとしの暮」と詠んだ。「ともかくも」は、亡き娘への愛惜は感じられるが、絶望や抑うつは感じられない。ちなみに、「あなた任せ」の「あなた」とは、阿弥陀仏のことを指すことは、定着した解釈だそうである。一方、近代科学としての心理学は、専ら、予測、コントロールや対処に執着してきたが、信心の力に関してはウイリアム・ジェイムズ（William James,1842-1910）などを除いて、概して無頓着であった。

加えて、一茶が、本願力への純真さ・無垢さについて、ヒトよりチョウチョの方が勝ると示唆するほどのアンチ・ヒューマニスト（反人間中心主義者）であることは、特筆に値しよう。このようなまなざしは、一茶特有のものではなく、宗派（ここでは真宗）を超えて広く仏教に共通するだろうが、このような視座に立って現代心理学を脱構築できるのか全く心許ない。行動主義の起源は進化論ということを根拠にして、認知行動療法系はヒューマニズムの系譜ではない、と力むのが精一杯であろう。

以上つらつら書いてきたが、本学会に入会したのは、以上のような思いを共有したり、議論したりする場があればいいなあ、と期待してのことである。ニューカマーですので、よろし

くご交誼お願い申し上げます！

ところで、2017 年に文教大学越谷キャンパスで、第 9 回学術大会が開催されることが、第 7 回学術大会の総会において決定された。本学会の先生方のご指導を仰ぎながら、文教大学心理系の同僚や院生、日本人生哲学感情心理学会(J-REBT)の仲間にも相談して、心理学と仏教学の相補性に関わるテーマを設定しようと思っている。

第　七　回　学　術　大　会　よ　り

第七回学術大会を終えて

跡見学園女子大学　阿部洋子

過日は、年末のお忙しいところ、跡見学園女子大学においで下さいまして、誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

さて、跡見学園女子大学は、文学部、マネジメント学部、観光コミュニティ学部の 3 学部で構成されております。つまり仏教学は勿論のこと、他の宗教に関係する独立した学部・学科をもっておりません。しかも本学会の学会員は、私一人ということもございまして、まさか大会校の打診があるとは、思ってもおりませんでした。

ただ、大会校の打診を頂く前に、このようなことがございました。私は会計監査をお引き受け致しておりまして、通常は、学会長のケネス田中先生の研究室がございます武蔵野大学にお邪魔するように致しております。ところが、何故か、ケネス先生が、跡見の文京キャンパスのある茗荷谷まで行きますとおっしゃったのでございます。そして会計監査の話が終わりましてから、キャンパスを見てみたいとおっしゃいました。駅から近くていいですねえ。建物もきれいですねえ等と誉めて下さるではございませんか。これは何かあるかもしれないという予感はございました。そして、その予感は的中したのでございます。

今回、大会校を引き受けて貰えないかねえ。

ああ、やはり…と思いました。

時期尚早とお断りしても良かったと存じますが、私は、日本心理学会、日本心理臨床学会、など様々な学会の大会校をお引き受けした経験から、会員である限りは、本務校で一度は大会校をお引き受けする義務があると思っておりましたし、また次回の大会校は高野山大学と決まっているものの、今回の大会校決めが難航しているようでございましたので、清水の舞台から飛び降りる気持ちで、大会校をお引き受け申し上げました。跡見学園女子大学は、仏教系の大学ではございませんし、更に私のような若輩者が大会委員長をお引き受けすることは憚られたのでございますが、このような経緯がございまして、大会校をお引き受け申し上げた次第でございます。

そして、もう一つ、大会校をお引き受け申し上げた理由は、初代学会長の恩田彰先生が、体調を崩されて御入院されたということを聞き及んでいたからでございます。恩田先生とのお付き合いは、私が書きました『唯識思想を通して心理学的考察を試みる』という拙論をお読み下さいましたことに始まり、某学会での発表の機会を与えて頂きましたり、更には某出版社発行の仏教文化に関する事典の編纂にも加えて頂きましたり、瞑想の会への参加にもお声を掛けて頂きましたりと、様々な道を開いて下さいました。こちらの学会へ会員として迎えて頂く機会も恩田先生から与えて頂きました。そのような訳で、何か御恩返しができればと考え、大会校をお引き受け申し上げました。7 月初旬に暑中お見舞いのお葉書を頂き、その時は、お元気そうでいらっしゃいましたが、それが最後の自筆のお葉書になってしまいました。わずか数日後の 7 月 20 日の朝、静かに御永眠なさいました。享年９０歳でいらっしゃいました。お陰様で大会は、大盛況に終わりまして、学会長のケネス先生からは、大会終了後「万歳！」という言葉の入ったメールを頂いたほどでございます。大会の開会の御挨拶でも申し上げました通り、この度の学術大会は、恩田先生への感謝の心をこめて、執り行わせて頂きました。恩田先生には、今回の大会の様子を直接、御報告できず、残念ではございま

したが、どこかで見守って下さっていたことと思っております。

ところで学生アルバイトは 4 名で実施するということでございましたが、本学大学院はドクターコースがございませんので、当日の学生アルバイトは、学部の私のゼミ生でございました。どうなることかと心配致しておりましたが、会員の先生方からも、スタッフの先生方からも、良くやっていると、お誉めの言葉を頂き、安堵致しております。行き届かぬことが多々あったかと存じますが、それは偏に私の至らなさということで御寛恕頂きたくお願い申し上げます。

ところで、大会運営に当たりましては、学会長のケネス先生を始め、梅津礼司先生、影山教俊先生、片岡秋子先生、藤能成先生、山口豊先生、常世田朋子先生、松永博子先生と強力なメンバーが実行委員として動いて下さいました。大会を無事に終えることができましたことを、ここに改めて御礼申し上げます。また大会テーマ“『臨床』～仏教と心理学からのアプローチ”や、公開シンポジウム「仏教的心理療法の現在と課題――臨床家からの報告――」をお考え下さり、開催前には、ケネス先生が新聞に記事をお書き下さったことも大きな反響を呼んだのではないかと存じます。更に、公開講演の講演者でいらっしゃる作田先生も御自身の大学や病院の方々にお声を掛けて下さり、参加者を集めて下さいました。このような皆様方の御力をもちまして、今回の大会を無事に、そして盛況に終わらせることができたと感謝申し上げております。

さて公開講演（基調講演）につきましては、武蔵野大学で勉強会が頻繁に行われておりますことや、文京区という場所を考慮し、作田勉先生（日本保健医療大学理事長・教授、元慶応大学医学部精神神経科准教授ほか）を講師にお迎えすることが決まりました。私は、現在、作田先生の病院・クリニックで心理士としての活動の場を与えて頂いております。慶応医学部でお手伝いをさせて頂いております時から、作田先生が密教的座禅というものに精通しておられ、東洋の叡智と、臨床の現場にいる人間の心の持ち方とを繋げていらっしゃることを存じ上げておりましたので、適任者ではないかと思い、お願い申し上げた次第でございます。

来年は高野山大学で大会が行われますが、作田先生は、高野山大学の先生とも懇意にされておられ、真言密教から NEW　STYLE　ZEN（密教的座禅）が派生したと聞き及んでおります。これも弘法大師様のお導きでしょうか。

　それでは末筆ではございますが、皆様の陰に日向にの御支援に感謝申し上げますと共に、次回、高野山大学での大会の御盛況をお祈り申し上げます。

合掌

第１回分科会報告

帝京科学大学　鮫島有理

第７回学術大会において、第１回分科会が行われました。分科会は、身延山大学で開催された第６回大会でのシンポジウム「本学会における分科会の発足と運営」で産声を上げ、今大会において初めての会合となります。

第１回分科会では、先のシンポジウムでフロアから出されたご意見や、当日挙げられた候補を元に、７つの分科会を決めさせていただきました。

現在、活動を行なっているのは以下の７つの分科会で、それぞれリーダー、サブリーダーの先生方がまとめてくださっています。また、第１回分科会の参加者は延べ 53 人でした（複数の分科会に参加可）。

●深層心理（唯識、アビダンマ、精神分析、分析心理学等）：佐久間秀範先生

●瞑想（実践、脳科学、禅、マインドフルネス等）：平原憲道先生、藤野正寛先生

●仏教的ケア（スピリチュアルケア、子育て、看取り、トラウマ、グリーフ、緩和ケア等）：井上ウィマラ先生

●宗派間連携（社会貢献等）：三輪是法先生

●カウンセリング、心理療法（真宗カウンセリング、内観療法、森田療法等）：

千石真理先生、黒木賢一先生

●仏教と心理学の運動史（人物史、思想史、実践史）：葛西賢太先生、加藤博己先生

●教育（仏教教育、道徳・倫理）：ケネス田中先生

紙面の関係で各分科会の紹介は省略させていただきますが、各分科会についてのご案内は学

会ホームページにて公開されておりますので、そちらをご覧いただければと思います。

今大会から初めて行われた分科会は、学術大会の恒例となっている交流タイムの時間に行われました。１時間という短い時間ではありましたが、リーダーの先生方を中心として、参集された会員の方の自己紹介や今後の分科会に寄せる思いなどが話し合われました。

分科会の目的として、専門性や研究性を高めることはもちろんですが、年に一度の大会への参加だけでは希薄になりがちな会員同士の交流を、より密なものとして頂くことに主眼を置き、会員一人ひとりの所属感を高めることを重視しております。

仏教と心理学という大変広い分野を扱う学会ですので、会員の方々の関心領域は多岐にわたります。そのような中で分科会をどのように運営していくか、各分科会はみなさんの関心領域を網羅できているかなど、もう一人の分科会担当である葛西賢太先生とは何度かお会いして話をし、メールでも毎日のようにやりとりをさせていただきました。現在の分科会では納まりきらない分野などがありましたら、今後も会員方々からご意見をいただき、大勢の方のご参加をいただけるような分科会を作っていきたいと考えております。

分科会は学術大会でしか会う機会がなかった先生方とも年間を通して交流し、自身の興味・関心領域を掘り下げる良い機会ですので、これからも積極的にご参加いただければ幸いです。

なお、今大会に参加されなかった会員の皆様のご参加もお待ちいたしております。まだどの分科会にも参加されていない会員の方がいらっしゃいましたら、件名を「分科会参加希望」とし、参加を希望される分科会名をご記入の上、学会事務局までご連絡ください。各リーダーに取り次がせていただきます。

今後とも皆様のご意見を伺いながら、よりよい分科会にしていきたいと考えておりますので、ご意見ご要望をお寄せください。また、末筆になりましたが、リーダーおよびサブリーダーの任をお引き受けいただきました先生方にはこの場を借りてお礼を申し上げます。

日本仏教心理学会第七回学術大会参加報告

東京大学大学院　松下　弓月

第七回日本仏教心理学会学術大会は２０１５年１２月１９日（土）に東京都文京区にある跡見学園女子大学で開催されました。キャンパスのある茗荷谷はお茶の水女子大学や筑波大学もある文教地区で、東京都内でありながらも緑が多く落ち着いた雰囲気が魅力的な地域です。この日は寒さが厳しく冷え込んだものの、天気がよく澄んだ空気が気持ちの良い日でした。

午前中には作田勉先生による仏教と密教の歴史と密教的禅に関する基調講演と、福祉・医療・寺院と様々な現場での援助実践に取り組まれている臨床家の方々を迎えてのシンポジウムが開催されました。どちらも臨床現場でどのように仏教心理学が実践可能なのかという非常に重要なテーマに関する豊富な臨床経験に基づくお話でした。

午後には８件の個人発表が行われました。発表順にご紹介いたしますが、本稿の筆者である松下弓月は、宗教儀礼が死別に伴う悲嘆からの回復にどのような効果をもたらすのかについて発表いたしました。悲嘆には宗教儀礼が役立つと言われていますが、研究者自身の観察や経験的知によって導き出されたものが多く必ずしも実証的裏付けがあるとは言えません。そこで今回は死別研究の代表的な研究者の挙げる宗教儀礼の効果を収集し、宗教儀礼による効果にどのような共通性が見られるか分類を試みました。

渡邊昇先生は、スピリチュアリティが危機にある現代社会における喪失とその受容に関して発表されました。精神的健康においてスピリチュリティの役割に注目しつつ、スピリチュアリティと距離を置いてきた団塊ジュニア世代が老いと直面する際に感じる困難さに対して、どうスピリチュアリティに基づくケアが可能か論じられました。仏教精神に基づく老人ホームあそか園での傾聴事例のご紹介もあり、臨床をテーマにした本大会に相応しいご発表であったと思います。

小笠原亜矢里先生のご発表は、老いを社会科学的な視点から扱う社会老年学の分野において提唱されている「Gerotranscendence 理論」に関するものでした。この理論では、老年期において生じる世界観や生活満足度の変化を西洋的価値観から東洋的価値観への移行と捉えます。本発表ではこの移行と禅の修行過程を図式化した十牛図との比較が行われました。老いを衰えだけではなく、叡智という肯定的な意味づけに着目して捉えることは高齢人口が増えていく中で非常に重要な視点であると思います。

藤野正寛先生は、集中瞑想と洞察瞑想における身体感覚の重要性について発表されました。近年、仏教の瞑想はマインドフルネス瞑想として心理療法やビジネスの領域へも広がりを見せています。発表では身体感覚に気づく集中瞑想と、身体感覚に気づきかつ平静さを保つ洞察瞑想の違いが神経科学の実証的な知見と照らしあわせながら論じられました。英語圏ではこうした研究が精力的に行われており、日本にその知見を広める上でも非常に重要な内容でした。

藤能成先生は科学的認識論の問題と十二支縁起の体験的理解の重要性について発表されま

した。科学的認識論に慣れきった私たちは、釈尊が説かれた教えも、言葉のレベルで理解しようとしてしまうところがあります。言葉が表現できるのはあくまでこの世界の一部でしかなく、そうした観念的世界を脱することで苦しみが消えるのだというご指摘は、仏教に関心を持つ私たちが忘れてはならない重要な点であると思います。

前田伸子先生、佐藤慶太先生、佐藤洋子先生、田中倫先生、小平裕恵先生、高屋継仁先生、中村千賀子先生は総持寺と鶴見大学が協働で行っている修行僧を対象としたコミュニケーション教育について発表されました。宗教者と臨床現場の距離が近づく中で、こうした教育が修行の一部に組み込まれていくことは非常に重要です。貴重な事例であるこの試みが注目され、より広まっていって欲しいと感じました。

吉田悟先生と大島裕子先生は、合理的志向と感情の重要性に着目した理性感情行動療法（REBT）と仏教の類似性について発表されました。REBT は、仏教とも考え方が近いとされているそうです。近年、臨床心理学の領域でも様々な心理療法を統合することの重要性が指摘されています。心理療法はもともと宗教的実践から生じたとする立場もあり、専門性の高まりとともに断片化した個々の分野を再び統合し全体性を取り戻す試みは、本学会に集う私達が何を扱っているのか見取り図を得る上でも非常に重要です。

山田博夫先生は、心の問題の理解とそこからの解放を目指すという点で共通する仏教と心理療法がいかにお互いに有益になりうるのかという点について発表されました。近年、心理療法の効果研究の分野でも面接内で宗教的な要素を扱うことの重要性が指摘されています。発表では事例の紹介もあり、両者を統合していきたいと考えている臨床家にとっても非常に役立つものであったと思います。

個人発表後には、様々なテーマに感心を持つ参加者同士が集まり交流する分科会の時間が設けられました。深層心理、瞑想、仏教的ケア、宗派間連携、心理療法、運動史、教育という 8 つのグループに別れ、自己紹介や今後何がやりたいのかなどが話し合われました。

各発表を簡単にご紹介してまいりましたが、あらためて振り返ると多岐に渡るテーマについて、研究者、臨床家、実践者と様々な立場の参加者が集い議論することのできる本学会の

貴重さを感じます。分科会という形で蒔かれた種が、今後どのように芽を出していくのか、いち参加者としても非常に楽しみです。私自身も少しでもそこに貢献していくことができるよう、今後も研究や臨床に励んでいきたいと思っています。

第七回日本仏教心理学会学術大会に参加させていただいて

武蔵野大学大学院　小笠原　亜矢里

去る２０１５年１２月１９日、関東の冬晴れの中、跡見学園女子大学文京キャンパスにおいて「日本仏教心理学会第 7 回学術大会」が開催されました。今学術大会のテーマは『臨床』ー仏教と心理学からのアプローチー。「心のケア」や「癒し」といった人間の内面へのアプローチがどの臨床分野でも必ずといってよいほど取りあげられる今日、今まさに求められている仏教と心理の「臨床力」に関する貴重なご講演や御発表ばかりで、学生であります私にとりましては、大変多くの刺激を受けた学術大会となりました。

学術大会は、大会長の跡見学園女子大学阿部洋子先生のご挨拶の後、精神保健学の権威でいらっしゃいます作田勉先生の公開講演が行われました。先生の公開講演では、御講義の後に会場において New Style Zen（密教的座禅）の実際のワークショップに入るという大変貴重な経験をさせていただきました。

会場全体がし・・んとする中、最初は雑念だらけであった私の心が徐々に内に内にと静まってゆく感じがとても不思議な感じがいたしました。「行」として、こうした禅や瞑想を行うことのない私ですが、後で振り返ってみますと、私自身不思議と気持ちが落ち着いたまま午後の個人発表に臨むことができましたのは、この作田先生のワークショップのお蔭のような気がいたします。

その後の公開シンポジウムにおいては、実践として「臨床」の第一線でご活躍の影山教俊先生、斉藤大法先生、福島一成先生、武田正文先生からの御発表があり、「臨床」の場での仏教と心理療法、精神医学、またカウンセリングといった各方面からの仏教的心理療法の実践的取り組みが紹介されました。

中でも武田先生の「寺院におけるカウンセリングルームの実践報告」は、僧侶であり臨床心理士でもいらっしゃる先生が、地方における「お寺」という場の重要性と、そうしたニーズにどう具体的に応えてゆくかという視点からの御発表であり、同じ北海道という地方のそうした問題を考えていかなくてはならない私にとりましては、大変学ぶところの大きなものでございました。

その後は休憩を挟んだ後に二教室に別れ、個人発表が行われました。今回は私自身も発表者ということもあり、全ての発表を聞くことが出来ずに少し残念な思いもいたしましたが、それでも一昨年、同じ教室で仏教を学ばせていただきました文教大学の吉田悟先生と門下の大島裕子さんの御発表では、先生の御専門でいらっしゃるＲＥＢＴと仏教に関して、本学における学部履修科目でもある「仏教心理学」の中でも取り扱われる最新の研究成果を拝聴することができました。

次いで、前回の学術大会からお話が出ておりました、学会の「分科会」が行われました。「深層心理」・「瞑想」・「仏教的ケア」・「宗派間連携(社会貢献等)」・「カウンセリング、心理療法」・「運動史」・「教育」といずれも興味深い分科会が用意されておりました。発表者のみならずどなたでも参加可能という全員参加型のこの分科会は、様々な御専門を持たれる会員の皆様が在籍し、興味関心も多種多様といった本学会ならではの魅力が活かされていく取り組みであると改めて実感致しました。今後は、学術大会におきましても分科会ごとの共同研究や活動などの成果発表も積極的に行われるのではと、大変楽しみにしております。

私自身も、今回は三輪是法先生がリーダーをお務めになられます「宗派間連携（社会貢献)」と、本学仏教教育部長でもいらっしゃるケネス田中学会会長の「教育」分科会に参加させていただきました。三輪先生や影山先生の教えは、学生としても一仏教徒としても大変ありがたく、こうして宗派の異なる先生方のもとで学ばせて頂けます機会に感謝しつつ、自らの足元もしっかりと見つめていかなくてはならないと身が引き締まる思いでした。

また、学術退会終了後の懇親会は、茗荷谷駅側のフランス家庭料理のお店にて終始賑やかな歓談の場となり、私は黒木賢一先生や太田俊明先生をはじめとした先生方から様々なアド

バイスや御講義を頂き、大変に有意義な時間を過ごさせていただきました。

最後になりますが、個人的にとても印象に残りました点は、お手伝いを頂きました跡見学園女子大学の女子学生さんのことでございました。今回は発表者でもありました私は、コピーや会場案内など、何かと皆様のお世話になりましたが、その際の女子大生さんらしい細やかな御心配りが大変印象に残っております。

昨年の身延山大学での学術大会の時もですが、一生懸命にお手伝いをしてくださる学生さんの姿には、いつも開催大学ならではの「おもてなし」を感じます。本学でもこうした　　機会におきましては、仏教系大学の本学らしい「おもてなし」ができますよう、今後も一学生として、また研究者として分科会活動にも取り組んでゆきたいと思います

お知らせ

ＧＲＡＣＥワークショップのお知らせ

「死にゆく人と共にあること」の継続プロジェクトとして、4 月 23・24 日に長弓寺、ジョアンハリファックス老師をお招きして 2 日間のワークショップを開催することとなりました。

下記の HP で受付を開始しましたので、ご連絡いたします。

http://bwdj.org

現在、すでに多くの問い合わせをいただいており、参加希望者数に対して参加可能枠が足りないことが予想されます。

参加ご希望のかたは、できるだけ早く申し込みをするよう、よろしくお願いします。

カウンセリング実習をご検討の皆様へ

公認心理士・キャリアコンサルタントが、国家資格化されることとなりましたが、カウンセリングの基礎である「傾聴」の実習を、学校のカリキュラムとして取り入れることをお考えの方は、お問い合わせ下さい。

少人数クラス（１２名程度から）で、オーダーメイドにて承ります。また、就職に有利となる産業カウンセラーの受験資格が取得できる養成講座の出前実習も、承ります。

お気軽に、お問い合わせ下さい。

一般社団法人　日本産業カウンセラー協会　神奈川支部　045-264-9521　（松村）

編集後記

今年も、桜を楽しむことができました。四季のある日本の土徳は素晴らしいと思います。しかし、桜はまた、諸行無常の象徴でもあります。

“明日ありと思ふ心のあだ桜、夜半（よわ）に嵐の吹かぬものかは”浄土真宗の開祖、親鸞聖人が9歳の時、出家しようと慈円和尚の元に行きますが、既に夜も更けていたので、今夜はとりあえず休みなさい、と言われたのを受けて、こう詠ったとされています。

今は美しく咲き誇っていても、嵐が吹けば一瞬にして散ってしまう・・・。

この満開の桜が教えてくれるように、世は無常であるからこそ、今なすべきことをして、後悔なく生き、人生を終えていくことができれば、と思います。

千石　真理　（心身めざめ内観センター主宰）

春の日が、暖かく感じられる季節が、また巡ってきました。各地の寺院では、お釈迦様のご誕生を祝う「はなまつり」のたよりも聞こえて参ります。

私事ではありますが、孫娘が幼稚園に進学し、先日入園式が行われた由。出席はできなかったものの、メールに添付された写真で晴れ姿を見ることができました。

私どもの協会でも、この時期は新学期。今年も、２００名を超す老若男女が、産業カウンセリングを学ぶために集い、当方は開講式のご挨拶に飛び回っている次第。

第七回学術大会は、あいにく私が担当している講座があったため、参加することが叶いませんでしたが、ニュースレターにお寄せいただいた原稿を見て、その雰囲気を味わわせていただきました。

松村　一生（シニア産業カウンセラー）